現代家族の危機的傾向
家族役割と家族情緒の乖離

山田　昌弘

現代家族問題を分析するに当って，情緒的側面の検討が不可欠である。それは，近代家族が，社会の生産ー再生産システムの一翼を担っていると同時に，情緒的満足の場として意味づけられている事に由来する。家族の機能的要請と情緒的要請の狭間で苦悩するのが近代家族の宿命であり，両者の要請の乖離が現代家族問題の制度的原因なのである。そして，家族役割の仕事化，家族情緒のレジャー化と言う二つのトレンドの分岐点に現代家族は立っているのである。

序　現代家族問題解明のために

現代先進資本主義諸国においては，多様な家族問題が人々やマスコミの話題に上り，研究や政策の対象となっている。離婚の増大，家庭内暴力，老人の孤独，子捨て，子殺しなど様々な現象が家族問題として関心を集めている。この家族問題状況は，現代家族の不安定性の証であると同時に，人々が家族の喜びや悲しみの経験に関心を抱いている事を示している。離婚した男女の悲しみ，離婚したくともできない夫婦の悲しみ，孤独な老人が味わう悲しみなどを家族問題は含んでいる。この家族問題が意味する所を裏返せば，人々が夫婦である事の喜び，異世代が触れ合う事の喜びを人々が求めている事を示している。Featherstoneは，現代人が家族に思い入れているこの特徴を，家族の詩的性格と呼んだ。彼はこの言葉で，形態的な側面に注目し情緒的側面を軽視してきた従来の家族論を批判した〔Featherstone 1979〕。

本論文は，家族の情緒的側面の分析を加える事により，現代家族の問題状況の原因・特質，将来像の解明を目指す。家族の情緒的側面を科学的に分析する事が，現代家族が持つ意味を理解する鍵なのである。第一節において，家族問題を分析する為の一般モデル，第二，三節において，近・現代アメリカ家族を例にして，現代家族問題状況の解釈モデルを検討する。

1.ー家族問題の分析モデル

1－1. 家族概念の検討

家族問題（病理）概念を用いる場合，「家族」が問題であるかないかを判断する作業が内包されている。その判断基準を家族理想像と呼ぶ。それは，「家族」に対して人々が求めるものである。家族間の相互行為の状態が家族理想像からずれがある時，当家族は問題だと判断される。大橋薫〔1980〕の分類を参考にし，外部の評価者（行為をコントロールする側）の内化する理想像からのずれを「逸脱」と呼び，家族当事者（行為を創出する側）の内化する理想像からのずれを「障害」と呼ぶ。障害が起った場合，家族当事者には何らかの不満が生じると仮定する。例えば，自ら進んで共働きをする夫婦は，逸脱だと判断されても障害ではない。又，離婚したくともできない夫婦は，逸脱ではなくとも障害が生じているのである。

家族問題のメカニズムを解明するためには，家族理想像の内容を明らかにする必要がある。その為，「家族」概念を検討しなければならない。

普通，家族は集団の一種〔森岡 1972〕と定義される。しかし，家族が通文化的に存在すると仮定する以上，集団が持つ固有とみなされた性質により家族を定義すると，家族現象の分析に不都合が生じる〔Verdon 1981〕。各研究者が定義した家族集団の固有の性質に，研究者が抱く家族理想像が投影されてしまうからである。例えば，共住，共食を家族集団の必要条件と定義する〔中根 1970〕なら，共住，共食しない家族（出稼，単身赴任など）はアプリオリに病理的形態と判断されてしまうし，親子は別居した途端，家族とみなされなくなる。この定義は，一定の家族理想像をアプリオリにすべての文化にあてはまるものと仮定してしまうが故に，現代家族（家族理想像が多様化していると言われている）を扱う場合，大変不都合である。日常的にも，家族概念は曖昧かつ流動的であり，家族集団の範囲を一義的に決定する事ができない。親子は，子夫婦が別居し独立していても，お互いに家族と認知しているのである。

家族は個人の主観の中に存在する概念である。人間は，家族と言う概念を知っている。それは，自己と他者の関係を家族と認知する作用が備わっている事を示す。この関係認知を家族カテゴリーと呼ぶ。橋爪は，人類に普遍的なLévi＝Straussの家族関係概念を修正し，(i)性別,(ii)母子，(iii)婚姻 の三カテゴリーで家族－親族認知が構成できる事を示した〔橋爪 1977〕。つまり，家族カテゴリーは，三種の現実の側の材料を基に構成され，個人の中に潜在した規則として存在している。橋爪は，家族集団は家族カテゴリーの現実体であると述べた。その意味を解釈しよう。家族カテゴリーには，自己と自己によって家族と認知された他者との相互行為を制御する諸性質が文化的に付与されている。例えば，母子カテゴリーに育児と言う規則が付与されている文化が多い。母は子に対し，育児と言う行為を規則に従って行なう。すると，家族カテゴリーは育児集団として，現実に観察可能なものとして現象する。つまり，何らかの活動が家族カテゴリーの性質として遂行される場合，家族は相互行為する集団として現象する。しかし，規則の内容（共住，育児，愛情など）は文化的に決定される。そして，この家族カテゴリー規則の内容が，家族問題の存否を判断する家族理想像なのである。

家族相互行為を制御する認知カテゴリーの規則に二種類（機能的・情緒的）想定する。(i)機能的制御とは，社会の物的生産－再生産システムに基くもので，機能的目標に従って行為が制御される側面を表わす。(ii)情緒的制御とは，情緒経験と相互行為が情緒規則によって制御される側面を表わす。〔注…情緒に対する規則とは，相手の行動，属性，相手自身などの認知と，生起する情緒との対応規則（情緒喚起規則）と，情緒と行動との対応規則（情緒表出規則）より成る。〕

すると，現実の家族相互行為を分析するに当り，二つの位相に分けて考える事ができる。機能的位相は，機能的規則によって解釈される部分で，具体的には家族間でなされる仕事を表わす。情緒的位相は，情緒的規則により解釈される部分で，具体的には，家族間で感じる情緒経験を表わす。

1－2. 家族問題の分析モデル

家族カテゴリー規則は，家族間の相互行為を制御すると共に，相互行為の評価因子として働く。例えば，夫婦は愛し合うべきだと言う規則

は，愛情表現としてお互いの行動を制御すると同時に，相手の行動が愛の印であるかどうかを判断する基準となる。

そこで，家族内相互行為を，局面（評価・制御）と位相（機能・情緒）により，四種の過程に分けて分析する。各過程における制御失敗が，家族問題（この場合は障害）となるのである。

図－1. 家族相互行為の四過程

位相 局面	情緒的位相	機能的位相
評価	情緒喚起過程	役割評価過程
制御	情緒表出過程	役割遂行過程

• 情緒喚起過程と家族情緒障害

相手の行為を解釈し，情緒が生起する過程を情緒喚起過程と呼ぶ。家族情緒経験を分析する為に，家族情緒規則（Family Emotional norm …ＦＥと略称）と行動情緒規則（Behavior Emotional norm …ＢＥと略称）を区別する。ＦＥは，文化的に家族カテゴリーに付与された情緒規則であり，例えば夫婦は愛し合うとか子は親を尊敬するなどの規則である。一方，ＢＥは，相手の行動に付与された情緒規則である。例えば，プレゼントをもらう事は愛情と解釈されるなどの規則を言う。

相手の行動に従ってＢＥがもたらす情緒は変化する。一方，ＦＥは文化的に定まっている故に，ＦＥは相手の行動の評価基準として働く。相手の行動とＢＥがもたらす情緒がＦＥと矛盾しない時，制御はスムーズに行なわれる。例えば，愛している夫（ＦＥ）がプレゼントをくれる（ＢＥ）ケースである。ＦＥがもたらす情緒とＢＥがもたらす情緒が矛盾した場合，個人は何らかの情緒不満を経験すると仮定する。これを家族情緒障害と呼ぶ。夫は妻を愛すべき（ＦＥ）なのに，冷たくする（ＢＥ）のようなケースがこれに当る。

• 役割評価過程

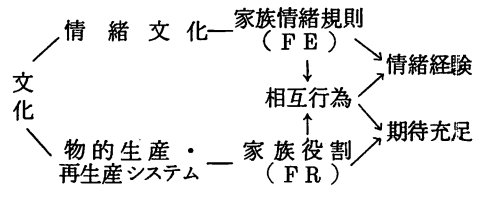
家族は，全体社会の生産，再生産システムの一翼を担っている。それ故，社会の存続，並びに個人の生存の為に家族内でなされなければならない仕事が文化的に定まっている。この家族カテゴリーに付与された機能規則を家族役割（Family Role …ＦＲと略称）と呼ぶ。例えば，親は自分たちの子を成人になるまで育てるとか，夫は妻を扶養し，妻は夫の世話をするなどの規則である。

役割評価過程で生じる家族障害を，家族機能障害と呼ぶ。相手の行動が，家族としての相手への期待を満たさない時に生じる。先程の例で言えば，親が子を育てないとか，夫は妻を扶養せず，妻は夫の世話をしないなどのケースである。ＦＲ（家族役割）が満たされない場合，個人には不満が生じ，場合によると生活に支障をきたす。その時，特定の家族内で遂行すべき仕事を，他者もしくは自分で代行する場合を，家族機能代替と呼ぶ。いわゆる「母子家庭」では，母が子に対する父の役割の一部も遂行している。

• 情緒表出過程，役割遂行過程

個人内部に生じた情緒と，家族役割（ＦＲ）は，自己の行動を制御する。情緒に沿った行動がなされる場合を情緒表出と呼ぶ。逆に情緒が抑圧された場合を情緒抑圧と呼び，個人は不満を感じると仮定する。ＦＲに沿った行動がなされる場合を家族役割遂行と呼ぶ。ＦＲ遂行が抑圧された場合，相手に家族機能障害が生じる。

図－2. 家族分析モデル



2.－近代家族制度の特質

2－1. 近代家族成立論

本論中の近代家族とは，近代社会に支配的であった家族理想像を指す。具体的には18世紀以降のヨーロッパブルジョワ，アメリカピューリタン家族から，現代核家族などを指す。

中世ヨーロッパ家族と比較した近代ブルジョワ家族の特徴が，子供に対する情緒にある事を示したのがAriesである。彼は，多様な史料から，子供への愛情を原動力として子育て共同体として近代家族が現象した事を示した。Ariesの主張を筆者の枠組で整理すると，(i)ＦＥ（家族情緒規則）の強化，成立と，(ii)ＦＥとＦＲ(家族役割）の結合の二点に要約される。

中世ヨーロッパ社会においては，現実としての家族内情緒経験は存在したとしても，文化的規則としてのＦＥは存在しなかったと考えられる。夫婦間の愛情は，夫婦であることの必須の条件ではないし，子供に情緒的に関与する事も規範化されなかった。一方，近代社会では，愛情がないと言う理由で夫婦が別れ，子を放っておく親は愛情の欠如と言う理由で非難もしくは異常視される。つまり，家族間の情緒経験が必須のものとして規則化されるのである。

またAriesは18世紀ブルジョワジーの中に愛情を持って子供の世話をする親が現われた事を示した〔Aries 1960＝1980 p.374〕。この事は，子に対する情緒（ＦＥの経験）が世話と言う役割行動（ＦＲ遂行）を生み，同時にＦＲの遂行が親のＦＥを満足させるという現象が現われた事を意味する。ＦＲとＦＥの結合（相互行為が相方のＦＥ，ＦＲを同時に満たす）の要請が，近代家族の根本的特質なのである。

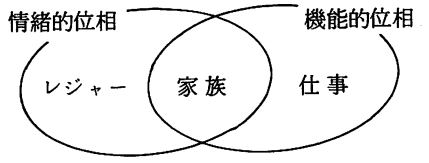
近代夫婦関係も，同じ特徴で解釈できる。例えば，恋愛結婚の成立〔井上 1966〕は，ＦＲとＦＥの結合の帰結である。生殖と言う夫婦の家族役割（ＦＲ）遂行には，愛情と言う情緒（ＦＥの経験）が必要であると言う規則が，恋愛結婚のイデオロギーの一部を構成する。又，夫婦分業も，機械的な分業とは意識されず，愛情があるが故にお互いの役割を遂行し，役割遂行が情緒を生むと意味づけられるのである。

2－2. 近代家族の本質的矛盾

社会への全体的視野で，近代家族の特徴をみてみよう。近代資本主義経済は，労働の非情緒化を推進した。社会的生産の非情緒化（個々人の情緒に左右されずに役割を形式的に遂行されるようにする）により，計画的な生産，消費が可能になった。同時に，情緒的満足の領域として，生産に係わらないレジャーが成立した。近代社会は，役割遂行と情緒経験の分離を促進した。

Miller & Sjobergは，現代アメリカミドルクラスの生活領域を，仕事，レジャー，家族の三領域に分けて分析した〔Miller & Sjoberg 1973〕。この分類を借用すると，家族を，情緒経験の場であると同時に，役割遂行が必要とされる場（生産－再生産の一翼を担う場）であると位置づける事ができる。これが，近代家族の制度的特徴であると共に，現代家族問題の制度的原因なのである。家族の機能的位相は，社会的生産，再生産の要請に従い，情緒的位相は近代的情緒文化の要請に従う。この二つの要請の狭間で苦悩するのが近－現代家族の姿なのである。

図－3. 近代人の生活領域



1970年以前の多くの家族社会学者は，家族の機能的位相と情緒的位相がアプリオリに調和するものとして議論を進めた。これを近代家族の予定調和説と呼ぶ。例えば，Burgess & Lockeの「友愛家族」の理念は，友愛と言う情緒を持ちながら社会的役割を果す家族を意味している〔Burgess & Locke 1945〕。

Parsons，Talcotの近代家族像も予定調和（ＦＲとＦＥの）を前提としている。Parsonsは，近代家族の二機能として，(i)子供の基礎的社会化と(ii)男女成人メンバーのパーソナリティーの均衡調整を挙げた。(i)は家族の機能的位相の要件（つまりＦＲ），(ii)は家族の情緒的側面の要件（ＦＥ）を示したものと解釈できる。そして，Parsonsは巧妙に(i)と(ii)を結合させる。彼が「本来小児的・退行的な動機づけ（情緒満足を指す…筆者）を行為化する事は望ましからざる事ではないと思う。大人が……子供的な要素を表現することは肝要な事であり……これを行うには，本当の子供と生活し，彼らのレベルに立って彼らと相互作用を行うのが最善の方法である。こうした事が親としての役割の中で行なわれる事実こそ……最も重要なのである。」〔Parsons 1956〕と述べているのは，子育てという家族役割（ＦＲ）の遂行が，同時に親の情緒を満たす（ＦＥの充足）事を「要請」しているのである。

Parsonsの見解は，ＦＲとＦＥの結合と言う近代家族理想像の本質を衝いている。家族役割（ＦＲ）遂行と家族（ＦＥ）経験が結合せねばならないと言う家族理想像は，近・現代人が持っているものである。しかし，現実の家族相互行為の中で，ＦＲとＦＥが矛盾する事があり得る。ＦＲ遂行は必ずＦＥを充足させる情緒を生むとは限らないし，ＦＥに基く行動がＦＲを満たすとは限らない。

近代家族の予定調和説への疑問は，家族が社会の中で果す役割と家族情緒（主に性満足という形で論じられた）の矛盾という形で，Freud〔1920〕などが指摘していた。例えば，Habermasは，近代ブルジョワ家族を，愛の共同体であるはずの家族（ＦＥ）が，社会的生産において果している家族の機能（ＦＲ）によって抑圧されるものとして把握した。〔Habermas 1962〕Parsonsとは逆に，ＦＲ遂行とＦＥ経験がアプリオリに矛盾するものとしてとらえている。

現代家族問題を解く鍵は，ＦＲ遂行とＦＥ経験がアプリオリに矛盾するか，調和するかの議論にはない。ＦＲとＦＥがどのような条件で矛盾し，その条件が何に由来するかを示す必要がある。そこで，20世紀アメリカ家族の変化を検討する事により，ＦＲとＦＥの矛盾の条件を見てみよう。

3.－現代家族の危機的傾向

3－1. 家族情緒と家族役割の乖離

1920年までに，アメリカミドルクラスにおいて，ＦＲの遂行とＦＥの経験の結合と言う規則が人々の間に内化されており，現代の社会学者が「伝統型」と呼ぶ家族理想像が成立していた事が，二つの例からわかる。1920年代にLindsay判事の指導により少年法廷（juvenil court）が普及する。彼は，子の犯罪は親の責任という事を強調し，親の愛情不足を非難した〔Lasch 1977〕。これは，親は愛によって子を育てると言う家族理想像を前提としている。又，1920年代に大学で「結婚講座を設けるものが増大した。そこでは，愛情と結婚生活の結合，子育てに愛情が伴うべき事などが議論された。」〔緒方 1981〕ことも一つの傍証である。

ここで，アメリカの伝統型家族理想像の特徴を抽出しておこう。夫は職業労働，妻は家事労働と言う分業形態をとり（ＦＲ），夫婦は愛し合う（ＦＥ）。親は子を愛情を持って（ＦＥ）育てる（ＦＲ）と要約される。この場合，ＦＥの内容が不明確なので，ＦＲの遂行がＦＥの充足の示標と信じられていた。例えば，妻は主婦役割を遂行する事が夫を愛している証となるのである。すると，現実の情緒経験はどうであれ，ＦＲを遂行している家族が正常だとみなされるのである。

伝統型家族理想像は，1960年以降危機的傾向を示す。1978年の統計によると，伝統型家族理想像を実現している家族は，全世帯の10％程度にすぎない〔Masnick & Bane 1980〕。その理由は，ＦＲ遂行とＦＥ経験の乖離が進んだ事による。

ＦＲは，資本主義経済の要請（市場化，専門化）と連動している。家族から見ると，家族内に，資本主義の論理が浸透してくる事を意味する。ＦＲの市場化とは，ＦＲ遂行を市場システムの論理で他者に委ねる事（ベビーシッターを雇う，保育所に預けるなど）を言う。ＦＲの専門化とは，ＦＲの内容が外部の専門家により指示される事（スポック博士の育児書に従って子を育てるなど）を言う。これらの傾向は，ＦＲ・ＦＥからの乖離を促進する。市場化により役割遂行を代替させたり，専門的知識で以って役割遂行する事は，家族に対する情緒的関与を不必要にし，むしろ邪魔にする。この傾向を家族役割（ＦＲ）の仕事化と呼ぶ。

一方，ＦＥの経験は，全体社会の情緒文化に連動している。1960年以降，アメリカでは新しいタイプの情緒満足が優勢になってくる。それは，性満足（sex）と自己露出（ self-exposure ）である。1960年以降，アメリカで性解放が進展する。避妊手段の普及，意識の変革などにより，役割遂行（生殖）と情緒満足（性満足）の分離が可能となり，情緒満足のために性行為が行なわれる事が正当化される。又，Sennettは，コミュニケーションによる相互の自己露出が，近代人の親密欲求を満たすようになると主張した〔Sennett 1976〕。それは，相手に対して自分の情緒を告白し，相手から告白される事により，個性確認と言う情緒満足が得られる事を意味する。この二種の情緒満足は，社会的生産と無関係なものとして行なわれ，役割遂行と分離している。これらの情緒満足の手段が家族内に持ち込まれると，家族情緒（ＦＥ）のレジャー化が進展する。夫婦間の性行為による満足，家族間のコミュニケーションによる満足，それらを引き出す為の家族レジャーが求められるようになるのである。

３－２．現代アメリカ家族問題の分析

家族役割の仕事化（ＦＲ）と家族情緒（ＦＥ）のレジャー化は，1960年以前のＦＲとＦＥの予定調和のイデオロギーを崩した。ＦＲの遂行は情緒を生まず，ＦＥの追求は機能的貢献とは無関係な所で行なわれる。すると，家族相互作用は，機能的位相と情緒的位相に明確に二分される。つまり，家族間のある行為は，機能的，情緒的のどちらかの意味しか持たない。これが現代アメリカ家族の特徴であり，多くの家族問題が，ＦＲとＦＥの乖離により解釈できるのである。

ＦＲとＦＥの乖離に対して，家族の対応には二通り考えられる。一方は，伝統的なＦＲの遂行を優先するもので，一方はＦＥの追求を優先するものである。Yankelovich らの用語を借りて，前者をトラディッショナル（traditional），後者をニュー・ブリード（New·Bread）と呼ぶ

（Yankelovich, et al., 1977〕。

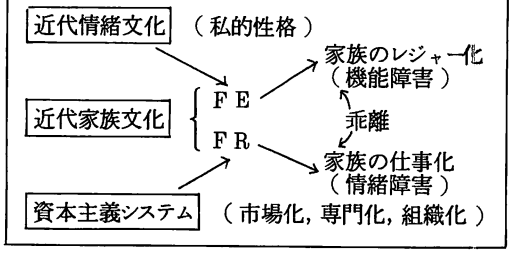
（Yankelovichは，子育てに対する親の価値観により，この二類型を抽出した。）

トラディッショナルは，アメリカ伝統型家族のＦＲの遂行を家族の第一要件と考える。夫婦は家族形態の維持，社会的機能の遂行に関心を集中し，子育て活動を熱心に行なう。それ故，自分の情緒満足を犠牲にしても，ＦＲの遂行を優先する。例えば，情緒的に不満でも離婚してはいけないと考える。つまり，機能的側面での障害は発生し難いが，現代アメリカ情緒文化の下では，情緒障害が発生し易い。独居老人の孤独や，主婦の夫に対する情緒不満は，伝統的家族役割の遂行が生んでしまう家族情緒障害である。又，家族内の強者から弱者に加えられる家庭内暴力も，情緒的交流よりも家族形態の維持を重視する意識が原因だと思われる。

ニューブリードは，ＦＥ，特に夫婦間の情緒的満足に関心を集中する。つまり，家族は情緒満足（レジャー）の場と意味づけられる。それ故，長期的な家族情緒障害は発生し難い。夫婦間で情緒的満足が得られない場合は，離婚し情緒的満足が得られる別の相手を捜せばよい。離婚，その結果としての父子，母子，再婚家族の増大は，ニューブリード家族が増大した証である。又，子育て活動は夫婦の情緒的満足を生むレジャー活動の障害となる。それ故，主体的に子供を生まない夫婦が増え，子育てを市場や公共機関に代替させるケースが多くなる。この傾向を極端にしたのが，結婚と言う形式にとらわれない「同棲」や，男女と言う性別にとらわれない情緒的満足を求める「ホモ家族」である。

ＦＥを優先すると情緒障害に陥り易く，ＦＥを優先すると家族が果すべき機能に障害が生じ易い。そして，機能か情緒かを選択する機会は，決して特殊なケースではなく，現代アメリカ家族のライフ・サイクルの中に組み込まれている。

図－4. 近代家族の解釈モデル



３－３. 現代アメリカ家族の将来

ＦＲとＦＥの乖離が進展するとの前提の下で，現代アメリカ家族の将来像を予測してみる。それには，政府の家族政策の性格が係わってくる。

一つのトレンドが家族の情緒集団化である。これは，ニューブリード家族の傾向を押し進めたものである。家族は情緒的満足を得る場と意味づけられる。以前，家族で果していた物的生産－再生産の機能は，市場や公共機関に代替される。成人した男女は情緒的満足を得られる相手を求める。子育てや弱者の世話は公共機関の保護の下に成人するという図式が考えられる。家族は形態的に多様化，流動化する。1960年以降のアメリカのリベラルな福祉政策は，結果的にこの方向を助長した〔Carlson 1980〕。

一方，トラディッショナル家族のトレンドを押し進めると，家族の仕事集団化が進展する。家族は，生殖－子育て集団として専門化する。家族内での情緒満足は不充分となり，家族外でのレジャー活動が増大する。アメリカ保守派の家族健全化のイデオロギー政策は，このトレンドを進める事を狙っている。家族は形態的，機能的に安定する。その代り，家族内情緒不満が増大すると思われる。

以上の二方向は，ＦＲとＦＥの乖離と言う前提があった。又，多くの家族社会学者は，家族の情緒集団化を予測し支持しているように思わ

れる。第三の道の可能性がないわけではない。それは，現実の社会運動の中に見られる情緒と役割の再統合の試みである。一つは，コミューン形成運動の中に見られる。そこでは，家族を弱化させる中で，新たな情緒と役割の再統合を探っている。又，伝統型家族のＦＲとＦＥの結合を復活させようとする運動（例えば，子育ては楽しいなどと主張する）も存在する。近代家族の閉鎖性を打破しようとする家族間連帯の試み（共同保育，故意家族など）も存在する。しかし，これらの運動が有力となる状況は作られていないのが現状である。

文献目録

Aries, Philippe., 1960, L'enfant et la vie faniliale sous l'ancien régime＝1980 杉山光信・志美子訳『子供の誕生』みすず書房。

Ball, Donald W., 1972, "The Family as a sociological problem", Social Problem, winter, vol.9, No.3.

Burgess, E.W., Locke, H. J., & Thomes, M. M., 1945, The Family : From Institution to Companionship, 1963, 3ed. American Book.

Carlson, Allan C., 1980, "Families, sex, and the Liberal agenda", Public Interest. No.58.

Featherstone, Joseph., 1979, "？" Harvard Educational Review＝1980 a, b, 青木保訳「アメリカ社会と家族 上，下」『トレンド』。

Habermas, Jürgen., 1962, Strukturwandel der Öffentlichkeit＝1973, 細谷貞雄訳『公共性の構造転化』未来社。

橋爪大三郎，1977，「家族の生成理論」未発表。

井上俊，1966，「恋愛結婚の誕生」→1973『死にがいの喪失』所収，筑摩書房。

Kanter, Rosabeth Moss., 1977, Work and Family in United States.

川本彰，1978，『家族（ファミリイ）の文化構造』講談社。

熊川文枝，1981，「変動するアメリカの家族」湯沢編，『家族問題の社会学』サイエンス社。

Lasch, Cristopher., 1977, Haven in a Heartless World,
1978, The Culture of Narccissism.

Lévi-Strauss, Claude., 1945, "L'analise stracturale en lingnistique et en anthropologie"→1958, Anthropologie structurale＝1972, 荒川・生松・川田・佐々木・田島訳『構造人類学』みすず書房。

Masnick, G. & Bane, M. J., 1980, The Nation's Families 1960～1990, Auburn House.

Miller, P. J. & Sjoberg, G., 1973, "Urban Middle-Class Life Style in Transition" The Journal of Applied Behavioral Science, vol.9, No.213.

中根千枝，1970，『家族の構造』東京大学出版会。

緒方房子，1981，「大学における結婚講座の始まり」『アメリカ研究』No.15.

大橋薫，1980，「家族病理研究の社会学的立場と社会病理学的立場」那須・上子編，『家族病理の社会学』。

Parsons, T., & Bales, R. F., 1956, Family Socialization and Interaction Process＝1970, 橋爪

貞雄他訳『核家族と子どもの社会化』。
Poster, Mark., 1978, Critical Theory of the Family, Continium.
Sennett, Richard., 1976, "Destructive Gemeinschaft", Partisan Review,
1977, The Fall of Public Man, Knopf,
1980, Authority, Knopf.
Verdon, Michel.,1981, "Kinship, Marriage, and the Family : An Operational Approach" American Journal of Sociology, №86.
Yankelovich, Skelly & White, (eds.), 1977, Raising Children in A Changing Society.
湯沢雍彦, 1979,「アメリカ親子関係の一断面」『ケース研究』170号。

（やまだ　まさひろ）